第66回日本小児保健協会学術集会　イブニングセミナー

2020　幼児健康度調査の50年～子どもとともに50年～

次回調査における新規質問項目

～貧困・スマホ・懲戒権～

松浦　賢長，原田　直樹（福岡県立大学看護学部）

Ⅰ．幼児健康度調査の濫觴

幼児健康度調査は今から遡ること約40年前，1980年に第1回調査が行われた。日本小児保健協会内の組織として幼児健康度調査委員会が組織され，初代委員長として平山宗宏東京大学教授が企画実施の指揮をとった。

「幼児健康度」という当時聞き慣れない単語については，『小児保健研究』第40巻第4号に組まれた特集によれば，「健康のレベルを高めるためには，まず健康の評価の方法を知る必要がある。この意味で健康度という表現を用い，（後略）」と記載されている[1)]。また，同じ特集の中で，幼児健康度調査に対しては，行政諸施策への反映が期待されていた[2)]。

当時，身体発育・発達をみるための乳幼児健診が軌道に乗ってきたが，そこでは疾病の予防，異常の早期発見，早期療育が主眼とされていた[1)]。ただ，乳幼児健診に訪れる子どもの9割は健康とされており[1)]，健診とは別の観点，すなわち社会的背景における幼児のあらゆる生態を明らかにするため[3)]のアプローチが必要とされた。

その時代背景を含め，これら幼児健康度調査の濫觴にあたると，幼児健康度調査は下記の目的を持つ調査として企画実施されたとまとめられる。それは「子どもの健康を評価するための考え方や方法を時代に先駆けて提示するために，社会的背景における子どもの健康の実態と推移を把握する調査」となる。

Ⅱ．幼児健康度調査の特徴

上に示したとおり，幼児健康度調査は「子どもの健康を評価するための考え方や方法を時代に先駆けて提示するために，社会的背景における子どもの健康の実態と推移を把握する調査」として企画実施され，今回，第5回調査（2020年）を迎える。

これまでの調査を通じた特徴は下記の3点にまとめられる。

① 早くから（1970年代後半より）子育て環境を中心に調査を企画

② 子どもの健康増進に関して10年先を見据えた先駆的な設問項目を採用

③ 母子保健施策のさまざまな局面において貢献

なお，これまでの歴代委員長は下記のとおりである。

第1回（1980年）：平山宗宏
第2回（1990年）：平山宗宏
第3回（2000年）：川井　尚
第4回（2010年）：倉橋俊至
第5回（2020年）：松浦賢長

Ⅲ．子育て支援の視点開発

「子育て支援」は比較的新しい概念であるが，幼児健康度調査ではすでに第1回調査（1980年）より子育て環境に着目し，「育児の相談相手」等についての設問を採用していた。また，第2回調査（1990年）からは，「母親の心身の調子」，「ゆっくりした気分で育児ができているか」，「父親の育児の状況」等の設問が採用された。

これらは後の健やか親子21にベースライン項目として採用されるなど，諸施策の充実に寄与することとなった（後述）。

Ⅳ．施策への反映（健やか親子21）

2001年から始まった健やか親子21において，幼児健

Presented by Medical*Online

康度調査の結果から11項目が評価指標に採用され，第３回調査（平成12年）の結果がベースライン値として引用された[4]。採用された指標（下記）をみると，とくに課題４「子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減」の分野において幼児健康度調査が寄与していることがわかる。

指標２-02	妊娠・出産について満足している者の割合
指標３-10	かかりつけの小児科医を持つ親の割合
指標３-16	６ヵ月までにBCG接種を終了している者の割合
指標３-17	１歳６ヵ月までに三種混合・麻しんの予防接種を終了している者の割合
指標４-03	子育てに自信が持てない母親の割合
指標４-04	子どもを虐待していると思う親の割合
指標４-05	ゆったりとした気分で子どもと過ごせる時間がある母親の割合
指標４-06	育児について相談相手のいる母親の割合
指標４-07	育児に参加する父親の割合
指標４-08	子どもと一緒に遊ぶ父親の割合
指標４-11	乳幼児の健康診査に満足している者の割合

Ⅴ．施策への反映（乳幼児健診標準化）

平成26年度厚生労働科学研究費補助金「乳幼児健康診査の実施と評価ならびに多職種連携による母子保健指導のあり方に関する研究班」による『標準的な乳幼児期の健康診査と保健指導に関する手引き～「健やか親子21（第２次）」の達成に向けて～』では，乳幼児健診における問診項目の標準化が行われた[5]。これは副題にあるとおり，健やか親子21（第２次）の達成を目的とした取り組みの上に位置づけられる事柄であるが，ここでも健やか親子21（第１次）で採用された幼児健康度調査からの指標が発展的に設定されている。

乳幼児健診において標準化された問診項目のうち，下記が幼児健康度調査の流れを汲む項目である。

［必須問診項目］

A-03	：	妊娠・出産について満足している者の割合
A-10	：	子どものかかりつけ医（医師・歯科医師など）を持つ親の割合
A-参10	：	１歳６ヵ月までに四種混合・麻しん・風しんの予防接種を終了している者の割合
C-５	：	積極的に育児をしている父親の割合
①-１	：	ゆったりとした気分で子どもと過ごせる時間がある母親の割合
②-２	：	子どもを虐待していると思われる親の割合

［推奨問診項目］

親の健康項目	：	あなたの最近の心身の調子はいかがですか。
育児環境項目	：	あなたの日常の育児の相談相手は誰ですか。
生活習慣項目	：	朝起きる時間と，夜寝る時間を書いてください。
生活習慣項目	：	食事や間食（おやつ）の時間はだいたい決まっていますか。
生活習慣項目	：	偏食や小食など食事について心配なことがありますか。

また，これら乳幼児健診の標準化は，国立成育医療研究センター「乳幼児健康診査事業実践ガイド」に引き継がれており[6]，幼児健康度調査における視点の先駆性・有用性を確認することができる。

Ⅵ．幼児健康度調査の設問構成

これまでの幼児健康度調査における設問は次の３つに分類することが可能である。

① 先駆的設問項目
② 接続設問項目
③ 継続設問項目

まず，「①先駆的設問項目」は，これからの子どもの課題をいち早く提示するために，子どもをめぐる今日的課題を反映した項目である。次に「②接続設問項目」であるが，これは乳幼児健診後から学齢期にかけて（４歳から６歳まで）の状況を把握することにより，乳幼児健診と学校保健との接続を図ることを可能にする項目である。そして「③継続設問項目」は，子どもの課題の変遷を長期的に把握するための項目である。

次項から，第５回幼児健康度調査（2020年）における先駆的設問項目の考え方を示していく。

１．次期調査の考え方：多胎児の子育てに関する課題

多胎児の子育てにおいては，周囲からの単胎児の子育て情報は使用できないことがあるため，いかにして多胎児の子育てに関する情報を収集しているか，ピアサポートを受けているか等について，新たな設問項目とする。

Presented by Medical*Online

2．次期調査の考え方：貧困に関する課題

主観的困窮感だけではなく，客観的な困窮を捉える必要があり，ライフラインの停止等の経験や所有について，設問に加える。さらに今日的な貧困課題として，お金の使い方の優先順位が挙げられる。子育て世代の保護者は，食費やライフラインに係る費用を削ってでも通信費（スマートフォン）は支出していることが推測され，これを設問項目とする。

3．次期調査の考え方：メディアとの接触に関する課題

忙しさからスマートフォンやタブレットを子どもに見せっぱなしにしていることがある。一方，教育系コンテンツを子どもに見せている場合もあり，コンテンツをどのように見せているかを把握できる設問項目とする。やむを得ずスマートフォン等を用いた時代から，そこに敷居を感じない時代，より積極的に活用したいと考える時代となっているとも予測される。

4．次期調査の考え方：子育てにおける懲戒に関する課題

民法で定めるところの懲戒（躾を含む）の内容を加える。注意の与え方や保護者の懲戒に関する捉え方を新たな設問項目として検討する。

5．次期調査の考え方：社会的孤立に関する課題

社会的孤立の捉え方であるが，ソーシャルキャピタルに着目する。これを測る設問項目として，家庭が社会に開かれているか，すなわち家庭に地域の人々の来訪があるかが一つのヒントとなる。

6．次期調査の考え方：父親の主体的育児に関する課題

幼児健康度調査の歴史を見ると，父親の育児参加から，父親の育児の時代に変化したことがわかる。さらに現代，父親の主体的育児・積極的育児の時代となりつつある。そこで生じるのは，父親の育児ストレスや“カッと”なったときの対応などのマイナスの側面である。父親による虐待の割合も上昇を続けている。泣きに対する対応や困り感などに着目した設問を新たに設ける。

Ⅶ．社会への還元

幼児健康度調査の設問項目がベースライン値と評価指標に採用された健やか親子21（第１次）において，リーフレットやパンフレットが累計で6,600万部が配布された。

さらに，これまでの幼児健康度調査データの分析を中心として，小児保健の「現在・過去・未来」をまとめた書籍がジアース教育新社より出版される予定である。

文　献

1）平山宗宏．幼児健康度調査にあたって．小児保健研究　1981；40（4）：320.
2）竹内嘉己．幼児健康度調査について．小児保健研究 1981；40（4）：319.
3）村上勝美．昭和55年幼児健康度調査について．小児保健研究　1981；40（4）：319.
4）山縣然太朗．平成25年度厚生労働科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）「健やか親子21」の最終評価・課題分析及び次期国民健康運動の推進に関する研究班『平成25年度総括・分担研究報告書』．2014.
5）山崎嘉久．平成26年度厚生労働科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）乳幼児健康診査の実施と評価ならびに多職種連携による母子保健指導のあり方に関する研究班『標準的な乳幼児期の健康診査と保健指導に関する手引き～「健やか親子21（第２次）」の達成に向けて～』．2015.
6）小枝達也．平成29年度子ども・子育て支援推進調査研究事業 乳幼児健康診査のための「保健指導マニュアル（仮称）」および「身体診察マニュアル（仮称）」作成に関する調査研究（国立研究開発法人 国立成育医療研究センター）『乳幼児健康診査事業実践ガイド』．2018.

Presented by Medical*Online